

スイミーの気持ちを想像させた。4年生は「一つの花」を扱い、修飾語に着目させて、お父さんのゆみ子に対する気持ちを読み取らせた。ひまわり学級では、「それはどうしてですか？」を扱い、「どうして」と質問された時には「それは...だからです。」という会話のきまりを確認した。5・6年生は「大造じいさんとがん」を扱い、オノマトペに着目させて大造じいさんの残雪に対する心情を想像させた。

4. 研究協議(成果と課題)

熱心な研究協議の中、「システム化した単位時間の学習の工夫」や「伝え合う力」全へきの長期研究計画の課題5にも関わる「成果を確かめる活動・評価」などについて多くの意見が交換された。また、授業について、助言者より「表現では、重要な語句に焦点を当てて文章を読み取れていた。」との感想があった。一方で、「読むことの指導に重点を置いているので、「話す・聞く」「書く」という部分についても力を入れた方がいいのではないか」というご指摘があり、今後の研究の進め方についても示唆に富む貴重なご指導を賜りました。

第3分科会
余市町立栄小学校



1. 研究主題

「確かな言語力を身につけ、相互に伝え合い深め合う子どもの育成」～話し合い活動を中心とした国語科物語文同内容指導を通して～

2. 研究内容

国語科物語文の同内容指導を通して、のびのびと相互に伝え合い、深め合う子どもの育成をめざし、国語科における基礎基本を定着させる取組のあり方、子ども一人一人が自分の考え方を持つことができる支援のあり方、話し合い活動を効果的にする教師のかかわり方と評価のあり方といった3つの視点で研究を深めた。

3. 公開授業

1. 2年学級「うみへのながいたび」「かさこじぞう」国語科物語文異内容指導

教室掲示や動作化を重視して子どもの意欲を高め、発達段階に応じた基礎基本をしっかりと身につけることをねらいとして異内容指導の授業に取り組んだ。

3. 4年学級「わすれられないおくりもの」国語科物語文同内容指導

音読の時間を充実させ、学習リーダーと指導者の二人を軸に意見交換を行い、本時の課題である『なぜ、みんなの悲しみがきえたのか』を追求した。

5. 6年学級「大造じいさんとがん」国語科同内容指導

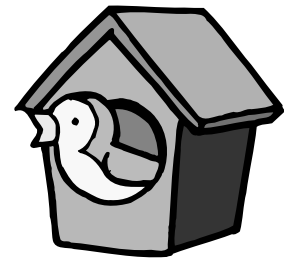
児童が掲示や板書を活用しながら、前時の学習のふりかえりや本時のまとめを自分の言葉で行った。また、学習リーダーを中心として、叙述にそって読み取りを深め、本時の課題である『「うん。」とうなってしまった大造じいさんの気持ち』を追求した。

4. 研究協議

授業者から、物語教材を同内容指導で進めるための取組や話し合い活動づくりの経緯が述べられ、それをもとに本時のねらいと反省点が話された。

協議の中では、これまでどのような支援の取組がなされ、それによって児童がどう変容してきたのかということが質問され、これまでの成果と今後の方向性が各授業者から話された。また、「話し合い活動と課題との関連性」や「一学年一人の授業での支援の方法」などに対する意見交換がなされた。

助言者より、同内容指導のデメリットに留意しながらねらいの達成をめざし研究を進めている本校の取組の重要性や発達段階に則した国語科領域目標の設定を行っている有効性の指摘をいただいた。



第4分科会
神恵内村立神恵内小学校



1. 研究主題

「児童一人ひとりに基礎・基本を確実に定着させる学習活動を目指して」～算数科を軸として～

2. 研究内容

「児童一人ひとりが、主体的に学習に取り組めるような指導計画を作成し、学習活動を進めるとともに、多様な評価方法を工夫し、指導と評価の一体化を進めることによって、基礎・基本を確実に定着させることができるであろう。」という仮説のもとに授業を構築した。

3. 公開授業

1年生の「どちらが長い」では、子どもたちが粘土で作ったヘビの長さや先生のヘビの長さ比べをする授業場面を公開した。どうやって先生のヘビ(紙粘土で作った曲がったヘビ)と自分のヘビの長さを比べるかが課題となり、間接比較で比べる方法を見つけた。

2. 3年生は、2年「新しい計算を考えよう」、3年「四角形を調べよう」の授業を公開した。2年生はかけ算の意味を考える内容、3年では四角形の仲間分けをしてその理由を発表する内容の授業を行った。

4年「三角形の仲間を調べよう」では、前時までに子どもたちが作ったストローの三角形を辺の長さに着目して仲間分けし、その理由を発表する内容の授業を行った。

5. 6年生は、5年「面積の求め方を考えよう」、6年「箱の形を調べよう」の授業を公開した。5年生は既習の図形の面積の求め方をもとにして、台形、ひし形、四角形の面積の求め方を考える内容、6年生は三種類の角柱の特徴について調べ、表にまとめる内容の授業を行った。

4. 研究の成果と課題

・事前テストを実施して子どもたちのレディネス

を把握した上で授業を組織し、座席表で個に応じた支援を明確にしている事などの工夫がみられる。

- ・目標・指導・評価を一体化して授業を構成することが大切である
- ・間接指導時の工夫の中で、ヒントカードは自力解決への支援という考えで作られているが、上位児童に対し発展的な内容のヒントカードがあっても良い。
- ・「ヒント」という言葉ではなく「確かめ」という言葉にすると良い。

第5分科会
積丹町立余別小学校



1. 研究主題

「自ら課題を見つけ・解決し、伝え合う力を培う学習の展開」～理科・生活科を軸として～

2. 研究内容

仮説 「身近な事象にじっくりと触れ、解決の見通しを持てる学習過程を工夫することで、自ら課題を見いだす力や、主体的に追究しようとする姿勢を育てることができるのではないか」から、課題意識を育て意欲を高める導入、授業作りのための視点等について、仮説 「確かな考えをつくり、かわり合いを意識した学習活動を工夫することで、伝え合う力を培い、互いに高まり合うことができるのではないか」より、伝え合い、高まり合う学習活動の在り方等の研究を進めてきた。

3. 公開授業

低学年生活科は「なつの町ようすをおしえあおう」の単元を扱った。ゲーム化による学習への意欲化や五感を使いながら既習事項の想起等、教師も加わる多様な表現法を活用し進めていた。

中学年理科は「ものあたたまりかた」の単元を扱った。導入実験でチョコレートを利用したり、生